

これからを生きる子どもたちに、「何があっても大丈夫な力」を

一連の教育改革において、特にこの数年は大きな変革期・過渡期に当たります。高校生のお子さんをおもちの方は、不安や不満を感じていらっしゃるかもしれません。そこで今回は、公立高校で長年教鞭を執り、現在は私立中高貫校の校長を務める真下峯子先生に、保護者ができる支援について伺いました。

「知識を教わる・覚える」から「自ら知識を取りに行く」「学びへ

保護者の方にはまずお伝えしたいのが、「間に合ってよかったですね」ということです。このたびの教育改革には、変化が激しく予測が困難な時代を生きるであろう今の子どもたちに、生きる力(私はこれを「何があっても大丈夫な力」と呼んでいます)を身につけさせる、という目的があります。逆に言えば、これまでの教育には足りていなかった部分があるということであり、わが子がこれからの時代に合った新しい価値基準に基づいた教育を受けられるというのは、とても幸運なことなのです。

今回の教育改革にはいくつか目玉がありますが、肝になっているのが、「知識を教わる」、「教わった知識を覚える」から「自ら知識を取

りに行く」、「テーマを深掘りしていく」への学び方の転換です。予測ができない時代に多様性に富んだ社会で生きていくためには、こうした広がりのある学びが不可欠です。誰かが答えや指示を与えてくれるのを待っているようではないのです。

「教える」から「引き出す」へ
教育現場も大きく変わる

教育改革の方針を受けて、私たち教員は、生徒の「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」を総合的に育てるためにはどういった授業をすればいいのか、教員の役割は何か?と模索し続けてきました。かつては、教員の多くが指導計画通りに規定の範囲を規定の進度で教えることに注力しており、その結果生徒がどう変わったか、生徒に

学校教育の変化に寄り添い、子どもの可能性を信じて伸ばす

どういう力がついたのかという成果の部分についてはしっかりと議論がなされています。しかし、昨今は、「生徒にどのような力をつけさせたいのか、ついたのか」という部分についての議論が活発になり、教員間で生徒の状況の共有が

進んでいます。さらに、個人面談やポートフォリオなどのツールを活用して生徒一人ひとりの学びや成長を振り返りながら支えようという取り組みも活発になり、教育現場は大きく変わってきました。その変化を肌で感じています。

大妻嵐山中学校・高等学校校長
真下峯子先生

1952年埼玉県生まれ。奈良女子大学理学部生物学科卒業後、埼玉県内の公立中学校・県立高校で理科・生物教育に従事。その間、上越教育大学大学院学校教育研究科で学び、修了(教育学修士)。埼玉県教育局県立学校部勤務、埼玉県立総合教育センター・主席指導主事、県立高校長を経て、2014年より現職。自称「ずっと生物学が好きで好きでたまらない理科の先生」。モットーは「学ばない人からは、人は学ばない」。



昨今は、程度の差はありますが、いわゆる「アクティブ・ラーニング」が高校教育にも浸透し、授業の組み立ても従来とは大きく変わってきています。アクティブ・ラーニングとは「生徒の主体的・対話的で深い学び」のことであり手法を指すわけではありませんが、実際に授業の中にディスカッションやプレゼンテーションを組み込むことで、生徒の主体的な学び合いが進んでいます。かつて一般的だった、教員が生徒に知識やノウハウ(知識の使い方)を教える、という一方的な授業ではなく、教員はファシリテーター的な役割に徹します。どんな導入なら生徒の興味・関心を引くか、どんなテーマについてディスカッションやプレゼンテーションをさせるか、これらの手法をいかに効果的なシーンで使うか、どのタイミングでどの生徒に問いを投げかけるか、関連する知識をどう補っていくか…こうしたさまざまな要素を考慮しながら、「生徒の主体的・対話的で深い学び」を組み立てているのです。

脱・偏差値主義。 高校の学びの目的は…?

一方、保護者のなかには、高校での学びの目的を「偏差値の高い大学に入ること」と据えている方も少なくありません。もちろん、希望する大学への進学は人生における自己実現の一つですので、高校の学びはそのための手段とも言えます。しかし、難関大学合格だけを目的にした学びでは、「予備困難な時代に何があっても大丈夫な力」を身につけるとい点において、あまりに視野が狭すぎます。これからの世の中の変化や子どもたちの将来を考えたときに、偏差値や教科学力の向上だけを重視した勉強で本当に大丈夫なのか、考えていただきたいのです。テストの点数や成績だけで、子どもの能力や成長を判断してはいないでしょうか。関心事を深く探究する力、自ら考える力、人と協力しながら物事を進める力、学んだことを使つて何かをしたいという課題解決意識…そういった力や意識が育つて

いるかどうかという視点を、ぜひもっていただきたいと思います。

大切なのは、学校と保護者が 同じ方向を見て歩んでいくこと

価値観が多様化する今の時代は、子どもの教育について、学校と保護者とが同じ方向を見て歩んでいくことが大切です。わが子が通っている学校では、どのような力を育てるためにどのような教育が行われているのか、背景にある意図や目的も含めて理解し、学校と同じ視点をもっていただきたいと思っています。

例えば私が校長を務める大妻嵐山中学校・高等学校では、従来は非公開だった授業研究会を「授業づくり公開授業研究会」とし、保護者や一般の方にも公開するようになりました。保護者からは「先生方がここまで努力し、試行錯誤されているとは知らなかった」という声を多数頂き、学校教育を閉じたものにせず、保護者に向けて発信し共有することの重要性を改めて感じました。

とはいえ現状としては、大学受験指導に偏った教育を行う学校は少なくありません。しかし、学びの場は学校だけではありません。学校、塾・予備校、自宅に加えて、地域での活動など第4の学びの場

があれば、そこから世界は大きく広がります。親としてできるのは、出会いの場を作ること。わが子が学びのなかでおもしろい、すごい、楽しい、好きだと感じている探究心の芽を伸ばせる場をつくることです。受験指導一辺倒の方針に疑問を感じられたのであれば、それはむしろチャンスなのです。

子どもたちは、可能性もバイタリテイも大人が思う以上にたくさんもついています。大人はつい自分の経験から勉強や進路選びに口出しをしたくなるのですが、子どもを信じ、学校と家庭とが一体となつてバックアップし、その芽を伸ばしていきましょう。

子どもの“おもしろい”“好きだ”を 伸ばせる場をつくってあげてほしい

